

令和4年度 奈良市立伏見こども園 研究実践概要

園長名 和田 江利子
全園児数 165名

1. 研究主題 「主体的に活動し、自ら遊びを創り出す子どもの育成」
—探究心の芽生えと深まりを見取るために—

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

研究初年度は、子どもが自ら遊びを創り出すために、心を動かすきっかけとなる事象が存在することが分かった。昨年度の研究2年目には、子どもが遊びを創り出す中で、様々なもの・ひと・ことと出会い、「感じる心」でどのように対象を見つめているのかを可視化し、心を動かす・反応・行動・探究へと循環する発達のループ過程を明らかにした。その中で、“探究”においても様々な姿を捉えることができたことから、探究を深めていく過程に着目し、各年齢の特徴を探っていきたいと考えた。

そこで、本研究では、子どもが身近な環境に関わり遊びを創り出す中で、どのように探究を深めていくのか、また、その成長過程でどのような特徴が見られるのかについて分析することにした。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・身近な環境に主体的に関わる中で、心を動かす瞬間を読み取り、探究の芽生えから探究を深める成長過程について探り、自ら遊びを創り出す子どもを育む。

②研究の重点

- ・図1の仮説に基づき、実践事例から「心を動かす瞬間」を読み取り、「探究の芽生え」「探究につながる模索」「探究の深まり」へとつながる各年齢の成長過程を明らかにする。
- ・探究を深めるために必要な援助や環境構成について探る。

③活動の方法

- ・「心を動かす瞬間」を読み取り、感覚的に物事を捉えている時期を「探究の芽生え」、曖昧で予想がつかないようなことを様々な方法で理解に繋げていく時期を「探究につながる模索」、これまでの経験を活かしたり新たな発見を得たりしながら理解を深める時期を「探究の深まり」と捉え、発達の姿を分析する。

図1 探究を深める成長過程（仮説）



■ 心を動かす瞬間 ■ 探究の芽生え ■ 探究につながる模索 ■ 探究の深まり — 援助 ——— 環境構成

事例1 「わっ、水が出てきた」

3歳児（7月）

子ども達はビニールプールの中で透明ホースに水を流して遊んでいた。ホースとペットボトルを持って難しそうに流していたため、近くにあったラティスを持って来て、ホースを挿し込み思う存分水を流せるようにした。A児がラティスの外側からホースに水を流して「流れていった」と、喜んで遊び始めると、ラティスの内側にいたB児の胸元に水がかかり、思わずペットボトルで水を受け、B児「いっぱい入ったよ」と、保育者と一



わっ、水が出てきた

芽生え(反応)

思わず水を受ける

緒に喜ぶ。A児は、何度も水を流して遊んでいた。B児は、ホースに興味を示し、A児と反対側から水を入れ始めたのでしばらく様子を見守ると、ホースはA児の方に傾き水が流れ出した。A児は「出てきた」と驚き、隣に挿してあったホースを咄嗟に取って水が出てきた所に挿し、ホースを繋ごうとしたが、上手くホースが繋がらずA児「これ繋げて、流れるとこ増やしたい」と保育者に伝えたので、ホースを繋げる。すると、今度は長くなったホースの両側から互いに水を流し始め、ホースはシーソーの様に上下に傾いては互いの方に流れる。そんなやり取りを繰り返すうちに、A児は自分の方へ戻ってくる水に反応して思わずホースを持ち上げる。その後、互いにホースを持ち上げては水を流す姿が続いた。

〈考察〉

透明ホースを使ったことで水の流れが見える面白さに心が動かされたこと捉えた。A児が流した水が予期せずB児にかかり、思わず体が動いて水を受け止めた姿を「反応」、行為そのものを繰り返している姿を「反復」と捉えた。また、「反応」の特徴として、A児が自分の方に流れてきた水に驚いたり、B児との関わりの中で、向こう側へ水を流したいのに何度も戻って来る水を止めたかったりした心の動きが、思わず行動に移す姿として表れていることが分かった。

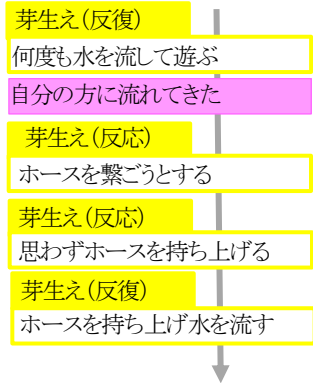


表1 事例から読み取った探究の姿

探究の過程で見られる姿	探究の捉え
反復	行為そのものを何度もする
反応	思わず体が動く様子

事例2 「トンネルの中で水の音がする?!」

4歳児(6月)

築山で水を流すことを繰り返して楽しんでいたC児が、築山の上から水を流すうちにトンネルに当たり「ん?今音が鳴ったよ」と気付く。C児がもう一度流してみると、トンネル内にいたD児E児が「ピチャピチャって鳴った!」と驚く。①「トンネルの中で水の音が聞こえたの?」と聞く。2人は「ピチャピチャって響いた」とうれしそうに話し①「すごいねえ、音が響いたんだって」と驚きに共感する。C児「え、じゃあこれはどう?」とペットボトルからバケツに変えて大きな水の音を鳴らそうと再び水を流す。②「どんな音がした?」C児「バッシューン!て鳴った」と水が跳ねる音を言い、D児「トンネルの中でバッシューンって鳴った」とトンネル内で響いている音を伝えている。2人の気付きの違いをしばらく見守り、思いきり水を流して音を確認されるようにタライの水を補充する。今度はC児もトンネルの中に入って3人で静かに耳を傾けて音を聞く。D児達の「また響いた」というやり取りを聞いて、C児は首を傾げながらもトンネルを出たり入ったりしている。何度か聞くうちにトンネル内で音の違いが分かったC児は「ほんまや、響いてる!」と表情が変わる。その後、3人はトンネルの奥でも音が響いていることに気づき、トンネル内を移動し、何度も音の違いを確認した。

〈考察〉

築山の上で水を何度も流すうちに偶然トンネルに水が当たって跳ね返り、今まで気付かなかった音に心が動き、音を意識し始めた瞬間に芽生えと捉えた。また、水量を増やして音の違いを「試す」姿や、トンネル内で水の音が響いていることに驚き、繰り返し確かめたりする姿を「模索」と捉えた。環境と関わる中で、音の響きや違いに「気付き」、曖昧なことを自分達なりに何度も「試す」「確かめる」中で、気付きを得ていく姿を探究につながる模索の姿と捉えた。ここでは、何度も試せるように水を補充したり、気付きや驚きに共感したりする保育者の関わりが「もっとやってみよう」という意欲につながったのではないかと考える。

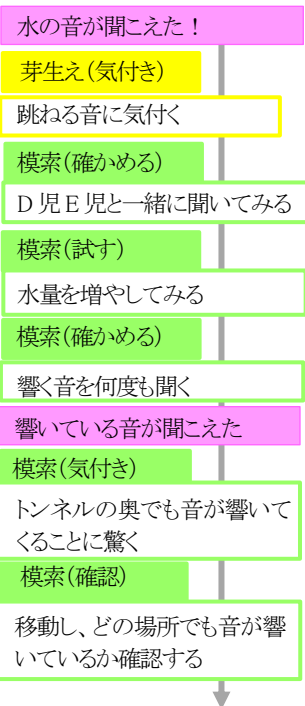


表2 事例から読み取った探究の姿

探究の過程で見られる姿	探究の捉え
気付き	意識していなかったことに気付く
試す	自分の思い付いたことを実際にやってみる
確かめる	曖昧な物事を確かめる
確認	気付きを確かめる
気付き	意識しながら行動していたことで気付く

事例3 「どうしたらよく飛ぶのかな？」

5歳児（4月～7月）

4歳の時、小さな段差に板を立てかけ、シーソーのように動かして物を飛ばして遊んでいた経験から、より遠くへ飛ばしたいと考え、「高いところならできるんちがう？」と、鉄棒に目をつけた。紐を結び板を固定することを考え付き、友達と一緒に飛ばすものを探す。F児はカラーボールを板の上に置き、板を動かして飛ばそうとするが、ボールが転がり落ちてしまう。その姿を見て話し合いの場を設け「壁があるんじゃない？」「カップにボールを入れたらいいと思う」などの他児の考えを取り入れ、牛乳パックやスポンジ等を使って壁をつくることになった。

翌日、素材を板に貼り壁をつくって飛ばすと、ふり幅が大きくなり、たくさん反動をつけられるようになった。G児「おお！コロコロしなくなった！」H児「思いっきり動かせる」と喜び、何度も飛ばす。そのうちにH児「他のものも飛ばしたいな」と3人で倉庫へ行き、F児「これを飛ばしてみよう」と、牛乳パックやペットボトルを見つけて持ってくる。G児「いっぱい飛ばすために、台も持ってこよう」と、ビールケースを持って来て板を動かす場所に置く。その上に乗って飛ばしてみると、ボールとあまり変わらない軌道で飛んだ。G児「えっ？飛んだなあ」F児「重くても飛ぶの？」と疑問を感じながら何度も試す。友達が飛ばす様子を見ていたI児が、「飛んでる。じゃあもつと重くても飛ぶんちがう？」F児「どれが一番飛ぶんかなあ」とさらなる疑問が湧く。傍で様子を見ていた保育者は①「それってどうしたら分かる？」と問い掛けてると、H児は少し考えて「重さを量ったらいいやん！」G児「そうや！体重計使ったらいいやん！」と、ひらめく。実際体重計で量ったが、軽すぎて計測できなかったため遊び用に軽いものも量れる量りを用意した。

次の日H児らは、早速飛ばすものの重さを量り始めた。「ペットボトルに蓋付けたら35（さんご）になった」と、表示された数字を伝え合う。しばらくすると「これ245やけど、よく飛ぶで」と飛ばしてみても重さを変え、量っては数字を書き、自分の飛ばすものの重さを伝え合いながら何度も飛ばして遊び出した。H児「軽いのはあんまり飛ばない」F児「同じくらい（の重さ）でも飛ぶのと飛ばないのもあるなあ」と、発見したことを伝え合いながら試し、飛ばすためには重さだけが要因ではないと感じ取っていた。

数日後、友達の様子を見ていたG児が「H君とF君とI君の飛ばし方が違うねん！」と、人によって飛ばし方が異なることを発見した。①「ほんとかやね、よく気付いたね」とG児の発見を受け止め、それぞれがどんな飛ばし方をしているのかをみんなで見るようにビデオに録って遊びの後の話し合いで映像を観てみると、飛ばす人や力加減等に違いがあり、同じ飛ばし方をしていないことに気づき、量りを使うことで分かったことや、重さ、飛ばし方によって飛び方がどう変わるのか試行錯誤しながら繰り返し遊ぶ姿に繋がった。

芽生え(願望)

思いっきり飛ばせる高い所を探す

模索(予想)

鉄棒でやってみる

模索(予想)

カラーボールを飛ばす

模索(工夫)

転がらないように壁をつくる

転がらずに飛ばせた！

模索(試す)

さらに飛ぶものがないか探し、高さを出して試す

重くても飛ぶんだ！！

深まり(新たな気づき)

重さがあっても飛ぶことに気付く

深まり(欲求)

一番飛ぶ重さを探す

深まり(ひらめき)

重さを量ろうと思いつく

深まり(比量)

重さを量る、記す、飛ばす、変えるを繰り返す

深まり(発見)

友達の思い、発見を受け止めながら考える

1人1人飛ばし方が違う！

深まり(新たな課題)

飛ばし方も関係していることを発見する

深まり(検討)

友達が飛ばしている映像を観る

深まり(追究)

一番よく飛ぶ方法を多面的視点で調べる

表3 事例から読み取った探究の姿

探究の過程で見られる姿	探究の捉え	新たな気づき	予測した以上の結果に気付く		新たな課題
願望	実現をさせようとする願い	欲求	したいと願う強い思い		
予想	これから起きることを予め想像する	ひらめき	経験から直観的に思いつくこと		物事を別の角度から考える
工夫	手段を見つけようと考えを巡らせること	比量	比べ量ることを試す		客観的に物事を見て思いを出し合って考えること
試す	経験から予想したことをやってみる	発見	一つのことに焦点を当てて探ることで見出したこと		深く調べて明らかにしようとする

〈考察〉

昨年よりもっと飛ばして遊ぶには高低差が必要だと考え、高さのある鉄棒だったら叶いそうだと「願望」をもち、今までの経験から軽いものほど飛ぶだろうという「予想」から模索が始まった。ボールを飛ばす中で、他のものも飛ばせそうだと心を躍らせながら他に何が飛ばせるかを「試し」だした。ボールより重たいものでも飛ぶことに「新たに気付き」、飛ばすためのもの、方法をさらに見極めようと探究を深める姿に繋がった。さらには、重さに着目して試し、どの重さが飛びやすいのか量っては飛ばす中で、同じ容器でも重さによって飛ぶ距離が違っていることを「発見」し、よく飛ぶためには重さ以外に飛ばし方も関わっていると感じ始めた。また、ビデオを録って飛ばし方を比較することで、板の高さや角度、傾き、物の置き方、勢い等、重さ以外に何が必要かを考えるようになり、どうしたら飛ぶのかを「検討」する姿に繋がった。自分や友達の姿を映像で客観的に見る、飛ばす度に気付いたことを言葉で伝え合う、視覚と言葉で行動を共有する等、自分なりの飛ばし方を探る目的意識の高まりが、探究を深める姿に繋がっていることが分かった。



5. 研究の成果

「探究の芽生え」では、身近な環境に関わる中で様々な現象に心を動かして行動に移すといった姿が特徴として挙げられる。3歳児の始めには目の前にある事柄に“やってみよう”と心が動き、驚きから思わず手を伸ばしたり、面白さから何度も繰り返したりする姿が多く見られた。4歳児では、思いもよらない偶然起こった出来事に対して心を動かし、“もっとやってみよう”という思いが芽生えの姿に繋がる。5歳児になると、思っていなかった出来事やうまくいかないつまづきに心を動かされ、“もっとこうしたい”という願いから行動に移すようになる。保育者が子どもの何気ない呟きや表情、仕草から心の動きを読み取り、ありのまま思いを受け止め、共感することが大切である。身近な環境と存分に関わり、心を動かす多様な経験を積み重ねていく重要さが分かった。

「探究につながる模索」の姿は4、5歳児に見られ、探究の芽生えで気付いたり、目的をもったりしたことに対して、思い付きを試そうとする姿が特徴として見えてきた。4歳児は曖昧な物事を確かめようと自分なりに用具や水量を変えたり耳を傾けて音を意識したり、思い付いたことを存分に試していく姿があった。5歳児では、これまでの経験を活かして予想しながら行動するようになる。これは、表2・3の「試す」からも読み取れる。知っていることを方法に取り入れながら考えたことを実際に行い、1つ1つどう変化していくか様子を見ている。模索の中でたくさんものや事象に触れ、十分に試したり、確かめたりして経験の幅を広げていく大切さが分かった。一人一人の思いに寄り添い、思い付いたことを十分に試せる時間、環境を用意しておくことも大切であると分かった。

「探究の深まり」は、経験を積み重ねてきた5歳児に見られ、探究につながる模索の過程で、新たな気付きやつまづきから心を動かされ、目的を実現させたい思いが強くなり、探究を深める姿に繋がるといった特徴が見えてきた。物の形態や質量、方法の違いなど、細かい部分にも目を向け、1つのことにこだわりながら試行錯誤を繰り返している。発見したこと、思ったことを伝え合い、互いの考えを受け入れながら目的に向かって粘り強く取り組む姿も見られ、物事を多面的に捉えながら、検討を繰り返し、探究を深めていくということが分かった。そのためにも、自分達で進めていこうとする姿を見守りつつ、十分に環境と向き合える時間を確保し、原因を考えたり、異なる視点で物事を捉えられたりできるように話し合いの機会をもち、子ども達の考えを引き出していくことが大切であると分かった。

これらのことから、3～5歳児の探究の姿を読み取ることで、子どもは見る・触れる・聞くといった五感を通して心を動かし、経験を積み重ねているだけでなく、多様な経験を積み重ねて1つ1つ知っていることを増やし、思考力や判断力、問題解決力に加えて、新たな発見を価値付けて深く追究していこうとする力が身に付くことで探究が深まっていくということが見えてきた。よって、豊かな経験を保障するために、様々な環境と出会い、もの・ひと・こととの関わりによって心を動かす感性や柔軟な発想で創造する力を育てていくことが重要であることが分かった。

6. 今後の課題

事例の分析から、子どもが遊びの中で何に心を動かし、どのように探究を深めていくのか、成長過程を明らかにすることができた。その中で、遊びの中の学びの姿を読み取り、子ども達にどのような経験をさせたいのか意図をもって保育をしていく必要性を感じた。今後も、子どもの心に寄り添いながら、自発性・能動性を引き出す援助や環境構成の在り方について保育研究を積み重ね、幼児理解を深めていきたい。